九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

多世代の家（Mehrgenerationenhaus）における体験の意味 ： 社交性（Geselligkeit）を中心に

石村, 秀登
熊本県立大学

https://doi.org/10.15017/6796407

出版情報：生活体験学習研究. 22, pp.13-20, 2022-07-30. The Japanese Society of Life Needs Experience Learning
バージョン：
権利関係：

生活体験学習研究　第22号　13－20（2022）

多世代の家（Mehrgenerationenhaus）における体験の意味

― 社交性（Geselligkeit）を中心に ―

石　村　秀　登*

The Meaning of Experience in a Mehrgenerationenhaus (Multigenerational House)

― Focusing on Sociability or Geselligkeit

Ishimura Hideto*

要旨　本稿では、ドイツにおける多世代の家（Mehrgenerationenhaus）の機能と活動内容を概観し、その役割を検討するとともに、社交性（Geselligkeit）に焦点を当て、多世代の家における体験活動の中心的な意味を明らかにする。

まず、フライブルク市の多世代の家でのインタビュー調査を参考にして、多世代の家の概要や活動内容を紹介し、その特質を探る。そして、多世代の家での様々な活動を支えている社交性に着目して考察を進め、社交的対話が遊戯的性格をもつこと、その遊戯的性格は、「原始的な要求」すなわち生活現実によって支えられていることを明らかにする。最後に、いわゆる体験活動にはそのような社交性の特質が含まれており、多世代の家での活動は体験活動としての意義を持っていることが示される。

キーワード　多世代の家、社交性、体験活動

はじめに

本稿では、ドイツにおける多世代の家（Mehrgenerationenhaus）の機能と活動内容を概観し、その役割を検討するとともに、社交性（Geselligkeit）に焦点を当て、多世代の家における体験活動の中心的な意味を明らかにする。

わが国では、この多世代の家について、管見の限り、高齢者福祉の視点からわずかに紹介されているに過ぎない（安原、ホイヤ 2019、村上 2016）。確かに、日本と同様ドイツも超高齢社会となっており、特に高齢者の孤立は解決すべき大きな課題である。そこで、高齢者とその他の世代が積極的に交流したり生活を支え合ったりすることができる仕組みを整えようとするのが、多世代の家の試みである。しかし、多世代の家は、家ごとに成立の背景や施設の状況が異なっていて特色があり、必ずしも高齢者施設として機能しているわけではない。

ここでは、まず、筆者が2018年に訪問したバーデン＝ヴュルテンベルク州フライブルク市の多世代の家（Mehrgenerationenhaus EBW［Erwachsenenbegegnungsstätte］Freiburg）でのインタビュー調査を参考にして、多世代の家の概要や活動内容を紹介し、その特質を探る。そして、多世代の家での様々な活動を支えている社交性に着目して考察を進め、多世代の家が体験活動の充実に寄与していることを明らかにしたい。

*熊本県立大学
連絡先：〒862-8502　熊本市東区月出3丁目1番100号　E-mail: ishimura@pu-kumamoto.ac.jp
TEL：096-383-2929（大学代表）

1．多世代の家の概要と活動内容

多世代の家は、「そもそもは高齢者をはじめ、若い夫婦や子供のいる家庭など、多様な世代が共同生活することを目的とした集合住宅を指すものであり、90年代なかば以降に各地で民間や企業などによって建設や開発がすすめられ、広まっていったもの」である。その後それは、多世代が交流する地域拠点として整備され、2006年からは連邦政府の主導で積極的に設置されるようになった[1)]。

したがって、現在の多世代の家は、従来の集合住宅に多世代交流を可能とする機能を付加した形態のほか、従来の教育・福祉関連施設、例えば青少年施設、家庭教育施設、教会施設、交流施設などにそのような機能を付加した形態、あるいは地域拠点として新たに設立された形態など、その実態は様々である。

ドイツ連邦家族・高齢者・女性・青少年省（Bundesministerium für Familie, Senioren, Frauen und Jugend）の公式サイトよれば、現在、ドイツ全土でおよそ530の多世代の家がある。多世代の家とは、「世代間の共生（Miteinander）が活発に行われる出会いの場所である。それは、共通の活動のための空間を提供し、生活共同体における隣人間の共助（Füreinander）を創る。多世代の家は、年齢や出自を問わず、すべての人に開かれていて、誰も彼もが歓迎される。」[2)]

多世代の家では、「自由意志に基づく参加」を掲げて、趣味を広げる教室、語学などの講座、高齢者世代と子育て世代の交流活動、定期的な交流イベントやプロジェクトなど、多彩なプログラムが展開されている。オープンスペース（共有の居間、台所、食事喫茶スペースなど）を置くことが必要不可欠で、人々が集うための場が整えられている。ここではまず、具体例として、フライブルク市にある多世代の家の概要、活動内容を紹介し、その特質を描き出してみる。

（1）フライブルク市の多世代の家の概要と活動

住民約23万人のフライブルク市にある多世代の家は、市中心部からおよそ３キロ離れた住宅地、Weingarten 地区にあり、運営の母体は、隣接している地区のカトリック教会である。この施設は、その名に「成人交流の場（Erwachsenenbegegnungsstätte）」とあるように、従来の教会交流施設に多世代交流機能を付加して設立されたタイプで、集合住宅型のような住居機能や共同生活機能は備わっていない。

筆者が2018年８月の訪問時に提供された、2017年間の記録によると、その施設には13の部屋と食堂、２つのボウリングレーンがあり、様々な団体、協会や行事のために部屋を提供している。定期的に活動しているグループが53あり、そのうち18は国際的なものである。日々およそ８つの異なったグループが活動している。全体でおよそ150の講座や教室が実施されており、83の活動がほぼ毎週提供され、そのうち54の活動は移民背景を持つ人たちにも提供されている。一日あたり244人の利用者、年間でのべおよそ48,000人が利用する。そのうちの８割は近くの Weingarten 地区や隣接の Haid 地区から来所している。およそ37％が移民背景を持ち、７％は難民である。

講座や教室の例を挙げてみると、例えば、移民の統合教室、幼児音楽教室、カードゲーム、ボウリン

フライブルク市の多世代の家の外観

グ、エアロビクス、ダンス、映画、骨盤体操、写真同好会、木工製作、文学サークル、チェスなどである。また、読書の場を提供するオープン書架や、教区相談会、家計アドバイスチーム、スマホ PC 助言会、アルコール依存自助会といった、相談助言を受け付けるようなユニークな試みも実施されている。火・水・木曜日は昼食会（Mittagtisch）が催され、毎回80人程度が利用している。それとは別に、昼と夜に出会いカフェ＆バーも開かれている。

施設には３人の専任職員がおり、他に委託協力員192人、ボランティアメンバー129人が関わっている。専任職員は、一人あたり週およそ10時間、協力員とともに活動し、指導やボランティアメンバーの世話などを行っている。外部との関わりも多く、19の連携事業、57の共同事業、11の交流事業が実施されていて、62団体とパートナー関係にある。

（2）多世代の家の特質

以上の活動内容や、筆者が実施したインタビュー調査内容から、多世代の家の特質をいくつか取り上げてみる。

①多様性の包摂

際立っているのが、出自や背景が異なる人々が、自らの経験や文化的基盤を活かしながら活動に参加することができるような機会を提供していることである。この家では、２～３年ごとではあるが、「国境と世代を超えたビュッフェ」が開かれ、15の国からのおよそ300人が準備に携わって、盛大に行われているようだ。また、その際、移民や難民の人たちのルーツとなる文化的アイデンティティーを尊重しながら、現在生活しているドイツへの積極的な融和を図る活動が展開されていることは注目に値する。例えば、以前に自国で音楽教師だった東欧からの移民が幼児音楽教室を開催していて、そこに集まっている子どもたちは音楽を通して出自の文化に触れている。施設長は、「移民の子どもたちにとって、異なっていると感じているがそれが何なのかよく分からないということが不安をつくりだし、移住先でよそよそしさを抱えたまま安心感を得ることができずに疎外されてしまう」と指摘する。彼らはドイツで育つが、そのうち自分の出自について自覚的になるときに、このような体験が生きてくるという。つまり、

「国境と世代を超えたビュッフェ」の様子

このような活動には、将来的な自己理解への基盤をつくり、移住先で地に足をつけて暮らしていくことができるようにする、というねらいがある。

また、これは移民や難民に関することに限られていないが、代理親（Patenschaft）の紹介も行っているという。代理親子は、面談などを通じてお互いを知り、書面を交わし、何かあったときは気軽に連絡をすることができるような状態にしておく。いわば身近なよろず相談役をあてがうのが、この代理親の仕組みである。これは、もともとは親を亡くした子どもの養育などを引き受ける役割があったそうだが、現在は、社会福祉の枠組みで整備されている里親や後見人のような制度とは異なり、インフォーマルなものである。

このような仕方で、世代をつなぐだけではなく、多様な出自や背景を持つ人々をつないで包摂していくことが、この多世代の家の特徴と言えるだろう。

②他機関との連携と職業訓練

多世代の家には多くの機関や団体が関わっている。例えば学校や青少年施設（Jugendstätte）と連携し、子どもたちに居場所や学びの場を積極的に提供していて、若者の職業教育の機能も併せ持つようになっている。中等学校を終える段階の生徒たちが一緒に多世代の家の昼食の準備をするようになり、最終的に家政マイスター資格取得を果たした例もあるという。若者がボランティア的に活動に参加することで、世代間の互恵的な関係も生まれる。インターンシップと継続的な社会貢献活動が一体になったようなもの、と言えようか。このような機会を多世代の家が積極的に創り出し、職業教育にも貢献している。

③食事や喫茶

ここでは実に様々な教室や講座が用意され、チームやグループでの活動も活発だが、とりわけ飲食を伴うことには力を入れている。上述のように、週３回の昼食会は多くの人で賑わっていて、多世代の家の最も重要な役割となっている。昼食チームのメンバーが食事の準備にあたり、一食500円程度と安価で食事が提供されている。喫茶も充実し、飲み物の種類も豊富だ。

食事・喫茶室

このほかに、出会いカフェ＆バーや、国際音楽酒場（Internationale Musikkneipe）、最近新しく始まったという修繕カフェ（Reparaturcafé）もある。このように、ここでは、様々な集まりや活動を、カフェ、バー、酒場などと融合させて実施している。

２．皆でテーブルを囲むこと ― 社交性

多世代の家では、上述のように、様々な世代の人たちが教室や講座プログラムに参加して学びあっている。それらの参加者は、一般的な社会教育的活動と同様に、例えば外国語を学びたい、楽器の演奏が上手になりたい、などの一定の目的を持って集っている。しかし、活動の際に特に重視されているのは、区切られた空間で整然と活動することではなく、例えばオープンスペースを活用するなどして、ゆるやかに皆でテーブルを囲むことである。

まず、活動を成り立たせている施設環境に注目すると、施設には活動のための部屋が多くあるが、各部屋へのアプローチは、ベンチとソファーが用意された「近づきの空間」とでも呼べるような場所となっている。例えば幼児音楽教室でも、そこに参加している親子は、半分近くがその活動に参加しているかどうかあまりはっきりとしないような様子で「近づきの空間」にたたずんでいたりするという。また、昼食会でも、いきなり食堂で見ず知らずの人たちと食事を共にするのはハードルが高いので、誰かと居合わせ、あいさつをし、うなずきあい、ちょっとした会話を交わし、近づいていく、そのような関わりが次第に深まっていく空間が必要だという。つまり、施設にゆっくりとなじんでいくための中間ゾーンが常に意識されている。施設長は、「信頼と関わりには時間が必要で、関係を生じさせることができるような空間形態や家具をとおして、多くの機会やチャンス（Gelegenheiten）を創り出すことが重要だ」、と述べる。

案内と部屋へのアプローチ

活動の内容に注目すると、例えば先述の修繕カフェは、物を修繕するという目的がありはするが、食事や喫茶を伴うことで、それを通して交流が図られるようになっている。つまり、設定された目的はあくまで大まかにそちらに向かっていればよいという程度のもので、より大切なのは、交流を図ることそのものなのである。したがっ

て、活動を企画している各グループが内容についてあらかじめ詳細に決め事をする必要はそれほどなく、集まってきた人たちと一緒に活動が進んでいくような仕方だという。

このようなあり方に注目してみると、多世代の家の多くの活動には、共生と共助を基盤とした緩やかな連帯感と社交性（Geselligkeit）が含まれていると考えられる。そこで、以下、社交性の概念と意義を検討していく。

（1）社交性の概念と社交的対話

社交性については、シュライエルマッハー（F.D.E.Schleiermacher）の「社交的なふるまいの理論の試み（Versuch einer Theorie des geselligen Betragens）」がよく知られている[3]。彼は、日常の大部分を占めていると考えられる職業生活や家庭生活以外の他者との関係において社交性を捉えている。つまり社交性は、合目的的世界から区別され、自由に集うという性質を持っているのである。彼は特に、社交における個人と全体との調和に関心を寄せており、「社交に持ち込まれる個性や独自性を確保しつつ、それらが互いに作用を及ぼし合い、社交的な素材の量が正しく配分されるようにする」[4] ことが必要であると述べる。つまり、社交の場では、個人的領域が状況に応じて弾力的に調整されること（しなやかさ、Elastizität）と、個人的な話題が全体を支配していないこと（一色に染められていないこと、Undurchdringlichkeit）が求められる。

このような社交性は、主に対話という形で現れる。ボルノウ（O.F.Bollnow）は、「社交的な交流がその中でなされる主要な手段は、対話」[5] であると述べ、それは、「日常の煩わしさから解放された領域のなかで進展」[6] するものであり、そこには「関与するすべての人たちの原則的な同権を承認」[7] すること、開放的な気楽さや軽快さ、快活さが存すること、興味深い対象に惹きつけられていること、などが含まれるという。そして彼は、そこに、自己が活性化され、世界の豊かさに開かれる可能性を見いだしている。

社交的対話は、「関与者の一人が、他の関与者の興味・関心を呼び覚ますような考えを述べたり、あるいはそのような出来事を報告したりすることから」[8] 始まるという。そして、他者と共にあることで、そこから興味深いことや刺激的なことがさらに生じる。「なにか興味深いことが孤独のなかの個別者に出会われることはめったにありません。彼はそのために他者を必要とするのです。わたしたちが語った当の事例がすでに、わたしたちがそれを一人の他者の前に提示して、この他者とそれに関して語りうるようにするということによって、はじめて一つの興味ある事例になるのです。」[9] 社交的対話においては、誰かが自らの関心事をさらけ出すことによって、それが構成メンバーを刺激して興味関心を引き起こし、その話題が共有されて発展させられるのである。

このような社交的対話は、全体として、遊戯的な性格を持っているとされる。「遊戯的な態度においては、なにか究極的なことを述べるという期待から解放されて、人間はいわば試みになにか或ることを言ってみることができるのです。その正しさは他者がどう答えるかによってはじめて決まってくるのです。いやそれどころか、人間は、さもなくば自分が一般に言えないだろうような、さまざまなことを言えるのです。彼は、たんに仄めかすことによって、いろいろのことを直接に言及することなしに洞察させることができるのです。それどころか、ここで彼は硬化させる概念的固定化からはそもそも免れているような領域に足を踏み入れているのであり、したがって無拘束にみえる話し方はけっして欠陥なのではなくて、一般にこうした事柄について話す唯一の可能性なのです。」[10]

ここでボルノウは、シラー（F.Schiller）が『人間の美的教育について ― 一連の書簡 ―』の中で、「人間は言葉の完全な意味において人間である場合にのみ遊戯し、また遊戯する場合にのみまったくの人間である」[11]、と述べた意味で遊戯を捉えている。この遊戯においては、遊戯それ自体が目的となっており、囚われのない自由なふるまいが可能になる。そして遊戯は、人間の精神の硬直化を防ぎ、人間の統一的全体性を生み出すことから、「完全に人間である」ための条件、すなわち理想とされる調和的な人間になるための条件となり得るのである。

（2）食卓の歓談（Tischunterhaltung）と社交性

ジンメル（G.Simmel）は、「食事の社会学」のなかで食卓の歓談について次のように言及し、その特

質を明らかにしている。「優雅ではあるが、しかしつねに一定の一般性と控えめさを保っている食卓の会話は、あの基礎を決して完全に感じることができないようにすべきではない。というのも、基礎をしっかりと保っている性格においてようやく、会話が織りなす表面の戯れをもつ、きわめてくつろいだ軽快さや優美さが現れるからである。」[12] ここに示される「あの基礎」とは、「原始的な要求（primitiv Bedürfnis）」であり、ジンメルが指摘しているのは、次のようなことである。すなわち、歓談では、理性的で抑制が効き、「一般性と控えめさを保」ちながら一定の方向性を意識してやりとりする術を身につけておかなければならない。しかし、それだけでは決して歓談になり得ず、全体としてはそうであったとしても、そこに感情や欲求がそのまま発現するような、いわば粗野で生々しい要素、「原始的な要求」が排除されていないことが必要だというのである。そうでないと、やりとりそのものがよそよそしくなって硬直化してしまい、歓談とは言えなくなってしまう。食卓では、「食べる」ということがそもそも「原始的な要求」、すなわち生理的欲求であるから、食卓においては歓談が成立しやすいということになる。

ジンメルが示しているこのような「原始的な要求」は、ボルノウの言う社交的対話の遊戯的性格の基盤をなしており、それを保障していると考えられる。「原始的な要求」とは、人間のいわば動物的な側面であり、食べる、排泄する、寝る、果ては生まれて死ぬことに至るまで、誰にも共通することだ。しかし人間は、このような動物的側面をできるだけ日常の表舞台から追い出そうとしてきている。他の生命を奪って仕立てる食べものは工業製品のごとく流通し、日々生じるはずの汚れや匂いを過剰なまでに消し去り、昼夜の区別なく街は動き、生死の場面を病院の片隅に隔離している。このような現代社会における人間のふるまいは、動物とは異なった精神性を発展させてきたからこそ生じることであろうが、しかし、そのような精神性をいくら重んじても、私たちは「原始的な要求」を完全に捨て去ることはできない。つまり、人間の精神性は、「原始的な要求」の基盤があってこそのものであり、それなしには精神的な所産は生じ得ない。「私たちは食べなければならない。そのことは、私たちの生存という価値の発展において、原始的で低きにある事実である。そのため、そのような事実は、あらゆる個人にとって疑いもなく他の個人と共通のものである。このことがまさに、共同の食事のための集まりを可能にするし、そのような媒介された社会化において、食事の単なる自然主義の克服は展開するのである。……なぜならば、ここでは低きものや取るに足りないものは、それ自身によって、それ自身を越えて成長したからである。低きもの（Tiefe）は、まさに、それが低さであることによって、より精神的なものや、より意義のあるものへと高められたのである。」[13] 食べること、すなわち皆に共通する原始的で低きものは、生理的欲求の充足であり、ここでは「単なる自然主義」と呼ばれている。しかし、それは共同性を帯びることにより、社交という精神的で高きものとなる。つまり、精神的な高みへと向かうためには、その条件として原始的で低きものがあらかじめ横たわっていなければならないのであり、それなしには社交は成り立たないのである。

３．社交性と体験 ― 多世代の家における生活体験

以上のように社交性の概念について考察してみると、社交性においては、社交的対話で見られるように、一方では、日常的に個別に携わっている現実から離れた遊戯的性格が保持されているが、他方で、その遊戯的性格を支えるであろう「原始的な要求」、すなわち必要に迫られた現実をしっかりと根づかせていることが前提とされている。

このことは、ジンメルが社交性を考察するにあたっての重要な視点である。「確かに、社交性の本質は、人間の現実の相互関係から現実を取り除くことであり、その相互関係以外には目的を認めず、それ自体が動いているような諸関係の形式的法則に従って、風通しのよい現実の領域を打ち立てることである。」[14] 私たちは、社交において、合目的的必然性に従って行動している実質的な現実の枠組みを超えて、無目的的で形式的な相互関係を成立させ、そのなかで遊戯的に振る舞う。しかし、それは、あくまで日常の現実、いわば生活現実につなぎ止められている限りにおいて成り立つことであり、また、結果的に現実の社会での合目的的なやりとりに役立ちうるのだ。そのような意味で、ジンメルは次のように言う。

「社交性を生活現実と結びつけているが、そうであってもやはり生活現実とはまったく異なって様式化された織物を織っている糸を、社交性が完全に断ち切ってしまえば、社交性は、遊戯から空虚な形式の気晴らしとなってしまい、生気のない、そして生気のなさを誇らしく思うような形式主義となる。」[15] 開放的で自由な社交的な振る舞いにおいても、その背後には生活現実が横たわっていなければならないのである。

このような、遊戯的な無目的的性と生活現実の必然性の二重性は、実は、いわゆる体験活動が成立する条件とも重なっているのではないだろうか。つまり、社交性に含まれる遊戯的性格は、体験活動に特有の、囚われのなさ、見通しのなさ、自由を保障し、合目的的活動のなかに偶然性、展開可能性を挿入する。そしてそれは、「自己変容の可能性を秘めた新たな始まりを我々に与えてくれる」ものでもある[16]。しかし、体験活動には、同時に、私たちが共有している生活現実に繋ぎ止められているという要素も必要である。そのような要素を持つ社交性は、「衣食住を中心とした私たちの基本的な生活の営みにおいて成り立ち、生産的な活動を含むもの」[17] としての生活体験であると言える。

実際に、私たちは一般的に、社交性が含まれるであろう活動を、社会体験活動や交流活動と名付けて、生活体験に含めてきた。例えば、猪山勝利は、生活体験内容の基本構成として「人間・社会関係性」を挙げ、「こどもの人間関係や社会関係性の形成は、……現代のこどもの生活体験として最も重視していくことが求められている」[18] と述べる。また、「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会論点まとめ」（文部科学省 2016）においても、「体験活動は、……青少年やその保護者を含む地域住民が集まり、交流をすることにより、地域に関心や愛着を持ち、地域の課題解決や地域づくりにつながるような機会としての役割」を担うべきだとされている[19]。このような活動は、様々な人間関係をとおして、何らかの目的を達成しようとするものである。例えば、皆でその地域の生活に根ざした作業を行ったり、共有されている伝統的行事に参加したりして、生活現実に根ざした実質を伴っている。しかし、それらと併せて、集い、食を共にし、対話や歓談を楽しむことなどがなされるのであり、多様な人たちとの社交的対話や歓談の性質、つまり、自由度を伴った遊戯的やりとりが含まれていると考えられる。

そしてこれらは、すでに見てきたように、皆でテーブルを囲んだり食事や喫茶を伴ったりする多世代の家での活動に含まれているものである。つまり、多世代の家の活動は、一定の目的を達成するべく設定されてはいるが、実際はそれが緩やかで、活動が始まってみれば別の方向に進むこともあり得るくらいの自由度がある。また、飲食などの生活現実を伴って、社交性に含まれている遊戯的なやりとりが可能になるような活動が多い。総じて多世代の家では、社交的対話が成り立つような基盤が整えられ、活動に参加する人々も、活動を通じて自然と社交性を身につけていっているように感じられる。多世代の家は、そのような体験活動を日々提供し続けている、躍動感に満ちた場所と言えるだろう。

【謝辞】

フライブルク市の多世代の家の調査では、2018年夏期休暇に入る前日であったにもかかわらず、当時施設長の Kuno Feierabend 氏には、施設内の心地よいカフェでおよそ２時間にわたって快くインタビューに応じていただき、本研究への情報提供にも承諾いただいた。この場を借りて感謝を申し上げる。

【注】

1）設置の経緯については、安原佳子、カリナ・ホイヤ「ドイツの「多世代ハウスプロジェクト」における家族支援」桃山学院大学総合研究所紀要第45巻第１号、2019年、104-107頁、を参照。

2）多世代の家　公式サイト https://www.mehrgenerationen-haeuser.de/、2022年１月20日確認。

3）F.D.E.Schleiermacher, *Versuch einer Theorie des geselligen Betragens*, in: H.J.Birkner（Hrsg.）, F.D.E.Schleiermacher. Kritische Gesamtausgabe I. Abt. Band 2, Berlin/New York 1984.

4）石村秀登「美的教育と社交性 ― シュライエルマッハーの社交性理論を手がかりに ―」九州大学大学院教育学研究紀要創刊号（通巻第44集）、1999年、282頁。

5）O.F.Bollnow, *Über Geselligkeit*, in: ders., Zwischen Philosophie und Pädagogik. Vorträge und Aufsätze, Aachen 1988, S.70.

6）ボルノー、森田孝ほか訳編『問いへの教育 増補版』川島書店、1988年、212頁。

7）ボルノー、森田孝ほか訳編、同書、220頁。

8）ボルノー、森田孝ほか訳編、同書、219頁。

9）ボルノー、森田孝ほか訳編、同書、222頁。
10）ボルノー、森田孝ほか訳編、同書、223-224頁。
11）Friedrich Schiller, *Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen, in einer Reihe von Briefen.*
https://www.deutschestextarchiv.de/book/view/schiller_erziehung02_1795?p=38、2022年１月20日確認。
シラー、清水清訳『美的教養論』玉川大学出版部、1952年、107頁、を参照。
12）G.Simmel, *Soziologie der Mahlzeit*, in: R.Kramme, A. Rammstedt（Hrsg.）, Georg Simmel. Aufsätze und Abhandlungen 1909-1918, Bd. I, Frankfurt.a.M. 2001, S.146.
ジンメル、居安正訳「食事の社会学」、『社会学の根本問題』世界思想社、2004年、164頁、を参照。
13）G.Simmel, *Soziologie der Mahlzeit,* in: R.Kramme, A. Rammstedt（Hrsg.）, a.a.O., S.147.
ジンメル、居安正訳「食事の社会学」、同書、166-167頁、を参照。
14）G.Simmel, *Soziologie der Geselligkeit*, in: R.Kramme, A. Rammstedt（Hrsg.）, a.a.O., S.191.
ジンメル、居安正訳「社会学の根本問題」、同書、80頁、ならびに、ジンメル、堀真琴訳「社会学の根本問題」、『ドイツの社会思想（世界思想教養全集19）』河出書房新社、1963年、265-266頁、を参照。
15）G.Simmel, *Soziologie der Geselligkeit*, a.a.O., S.191.
ジンメル、居安正訳「社会学の根本問題」、同書、80-81頁、ならびに、ジンメル、堀真琴訳「社会学の根本問題」、同書、266頁、を参照。
16）石村秀登「『体験的な学習活動』に関する一考察 ― 体験と経験の可能性 ― 」熊本県立大学文学部紀要第16巻通巻第69号、2010年、83頁。
17）石村秀登・石村華代「学童保育における生活体験 ― 計画性と評価をめぐって ― 」日本生活体験学習学会誌第15号、2015年、64頁。
18）猪山勝利「こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究」日本生活体験学習学会誌創刊号、2001年、8頁。
19）青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会」における論点のまとめ、平成28年。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/036/gaiyou/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386845.pdf、2022年１月20日確認。

【参考文献】

村上寿来「ドイツにおける世代内および世代間交流に関する一考察 : KDA および「多世代の家」へのインタビュー調査から」名古屋学院大学論集社会科学篇第53巻第２号、2016年。
G.Simmel, et al., und Debatten, *Verhandlungen des ersten Deutschen Soziologentages vom 19.-22. Oktober 1910 in Frankfurt a. M. : Reden uud Vorträge*., Tübingen 1911.